

幼児どうしが手をつなぐ行動についての一考察

柴田直峰

A Study of Children's Behavior of Holding Each Other's Hands.

Naomine Shibata

The purpose of this paper is to observe children's behavior of holding each other's hands. 49 pairs of preschool children standing side by side and holding the other's hand were observed.

The main findings were as follows. a) When two children held hands each other, the palm of one of the pair's hand was facing his/her forward ('forward hand') and the other's palm was facing backward ('backward hand'). There was strong consistency in the direction of one's palm when switching to his/her hands of pairs. b) Only when 3-year-old and 5-year-old held the hands each other, there was tendency that 3-year-olds were held hand by means of 'forward hand'. c) When one of the pair reached to hold first, the direction of the palm was forward regardless of the age. These results suggest that children have preference to hold hands facing one's forward because the meanings of the 'forward hand' is to be given contact comfort and to be led.

問題の所在と目的

日常的な保育場面で、子どもが手をつなぐ場面は多くある。例えば、施設内外における移動の際に保育者は直接子どもと手をつなぎ、また、子どもどうしに手をつながせて誘導したりする。また、子どもどうしが「あっちへいこう」と場所を移動する時や、遊びに誘う時に自発的に手をつなぐことも頻繁に観察される。では、子どもにとって手をつなぐ行動はどのような意味があるのだろうか。また子どもたちはどのように手をつないでいるのだろうか。

人が他者と手をつなぐことを中心とした心理学的な研究はこれまでほとんど行なわれていない。少し広く手をつなぐ行為を含む研究を概観してみると、研究の視点は次の3点にまとめることができるだろう。第一の視点は、手をつなぐ行動は身体接触 (body contact) であり、また接触慰撫 (contact comfort) であるとして愛着や愛情の形成の観点から研究したものである。第二の視点は、第一のものと関連して手をつなぐ行為の触感覚の側面に注目し、治療過程の指標や介入手段として手をつなぐ行為を捉えた研究である。さらに第三の視点は、社会的関係と手のつなぎ方との関連を見た研究である。

第一、第二の視点からの研究は、触感覚に注目をしている。触れる (touching), 抱きしめる (holding) 行為と同様、手をつなぐ行為も乳幼児期における特に親からの身体接触として重視され

ている。それは、身体接触から乳幼児が得られる安心感や安定感が、情緒的な発達にとって不可欠な行為として認識されているからである（大坊, 1990）。手をつなぐ行為が含まれる身体接触は、看護の場面（Aguilera, 1967; McCorkle, 1974）や教育場面（McNamara, J. R., 1969）での介入の手段として用いられている。また、触覚に同一性への固執のある自閉症児の場合、親と手をつなぐことを嫌がることもある。このような場合、手をつなぐことを一つの指標として療育や介入が行なわれている（中村, 1987; 山岸, 1990）。

第三の視点からの研究としては、大人が子どもと手をつなぐ場合のつないだ手の形態を調査したものがある。大人と子どもがつないだ手の形態にはいくつかの種類があり、それは子どもに対する大人のリーダーシップのあり方とみなされている（山本, 2000）。山本によれば、日本の親子間では他の民族に見られる「親が子の腕や手首、甲を掴む」ことは少なく、ほとんどが「掌を合わせてつなぐ」ことが指摘されている。日本の親子関係において親は明確なリーダーシップを発揮するというより、「軽く子どもの手を引いて知らせる」といったゆるやかな形態を好むという。日常的な行為である手をつなぐ行動に、リーダーシップのような社会的関係が反映されている点は興味深い。では、子どもどうしが手をつなぐ場合にも、何らかの社会的関係が反映されているのだろうか。もしそうだとしたら、どのような関係が手のつなぎ方に影響しているのだろうか

子どもどうしが手をつなぐ行動は、あまりに日常的で些細な行為のためかこれまで心理学においては研究されてきていないと思われる。そのため、本稿の目的の第一は、幼児どうしが手をつなぐ行動を分析し、どのようなつなぎ方があるのかどのように手をつないでいるのかを調査し、まず基本的なデータを集めることである。さらに、子どもどうしはなぜそのようなつなぎ方をするのか、つなぎ方を決定する要因は何かを探ることを第二の目的とする。つまり、先行研究で取り上げられている手つなぎの触覚の側面である第一の視点と、社会関係の側面である第三の視点を、個人の発達という観点からどう統合できるのかを検討することである。

方法

- 1) 観察日時：2005年の8月および2006年9月から10月に行なわれた。
- 2) 観察場所：保育所内の廊下および保育室内の一角で行なった。
- 3) 被験児：京都府下および京都市内の保育所に通う年少児、年中児、年長児を対象とし手つなぎ

表 1. 観察対象としたペアの数と成員の平均年齢（同年齢クラスのペア）

	年少・年少	年中・年中	年長・年長
ペアの数（組）	16	15	18
平均年齢（歳；月）	3；11	5；0	6；1

表 2. 観察対象としたペアの数と成員の平均年齢（異なる年齢クラスのペア）

	年少・年中	年中・年長	年少・年長
ペアの数（組）	14	14	12
平均年齢（歳；月）	3；11	5；00	3；11
（上段は低年齢クラス 下段は高年齢クラス）	5；00	6；00	5；11

行動を観察した。手をつなぐためのペアには、同一保育所の同年齢クラスどうしのペアと異なる年齢クラスの幼児のペアとがあり、それぞれのペアの数と平均年齢を表1、表2に示した。ペアの成員は全て異なっており、観察された個人は年少児57名、年中児58名、年長児61名であった。ペアの作成は保育者によって無作為に選んでもらい、男女比は均等であった。なお、観察の行なわれた保育所では通常はクラスごとの保育が行なわれているため、子どもたちの保育所での生活は大半をクラスのメンバーと共に過ごしていた。

4) 手続：観察場所の床にあらかじめ色違いの2枚のケンステップ（写真1；直径40cmのポリエチレン製の平たい輪で1箇所に方向を示す矢印が付けられている，日本健商製）を，矢印の向きが平行になるように約30cm離して並べて置き，幼児に「ここに一人ずつ入ってごらん」と教示し，矢印の方向を向かせて立たせた。次に2名に対し「手をつないでごらん」と教示し，手をつながせた。さらに，「そのままこの向き（ケンステップの矢印が示す方向）に歩いてごらん」と教示し，手をつないだまま数歩歩かせた（以下「一回目」とする）。



写真1. ケンステップ

また，つないでいたペアの手を離させ「今度は反対になるうか」と教示し，ペアの立つ位置（左右）を交代し同様の手順で手をつなぎ歩行してもらった（以下「二回目」とする）。

子どもたちが手をつなぐ様子，歩行する様子は，観察場所に設置されたVTRによって録画された。録画は，幼児の後方から手の部分を中心になる位置で行なわれた（写真2参照）。



写真2. 観察された幼児どうしの手つなぎの状況（左；一回目，右；二回目）

結果と考察

分析1. つなぐ手の形態について

幼児どうしが歩き出す直前に最終的にどのような形態で手をつないだかを見ると，全てのペアが掌どうしを合わせたつなぎ方をしており，山本（2000）で観察されたような手首や腕を持つつなぎ方は観察されなかった。

一般に掌を合わせて横にいる人と手をつなぐ時には，ある人の掌面が前額面に対し前向き（掌が顔の方向，手の甲が自分の背中の方を向く回外位）であり，他方の人の掌面は前額面に対し後ろ向き（掌が背中の方，手の甲が自分の正面方向を向く回内位）になる。本稿では便宜的に前者を

「順手」、後者を「逆手」と呼ぶことにする（図1のイラストは二人の人物が手をつないでいるところを正面から見たものだが、向って左側の人物が左手を「順手」でつないでおり、右側が右手を「逆手」でつないでいる）。すなわち、幼児どうしが手をつなぎあうとき、すべてのペアにおいて一方の成員が順手であり他方が逆手というつなぎ方になっていた。



図1. 一般的な掌を合わせてつなぐ手のつなぎ方（人物の正面から見た様子）

このつなぎ方について、ペアの成員の順手あるいは逆手が一回目と二回目とで異なっていたか一貫していたかを各ペアごとに観察し、表3の結果が得られた。表3から明らかなように各ペアの成員のうちどちらが順手でつなぐかは、つなぐ手の左右に関わらず、またペアの成員がどのクラスであるかに関わらず非常に強い一貫性のあることが示された。このことは、幼児がつなぐ手の形態は、掴む・握るといった手指や腕の運動機能や利き手といった身体的な制約とは関係なく、ペア間で一定していることを示している。

では、順手あるいは逆手でつなぐことと年齢との間には関連があるのだろうか。この点を分析するために、異なるクラスで手をつなぎ、つなぐ手の形態が一貫していた年少児・年中児14ペア、年中児・年長児11ペア、年少児・年長児11ペアを対象とし、年齢の低い子どもが順手だったのか年齢の高い子どもが順手だったのかをカウントし表4に示した。表4の結果を χ^2 検定したところ、表の分布には偏りのある傾向が示された ($\chi^2(2)=4.89, .05 < p < .10$)。残差分析の結果、年少児・年長児のペアの場合のみに、年少児が順手になることが多いことが示された。

表3. 一回目と二回目における成員のつなぎ方の一貫性（ペアの数）

	同年齢クラスのペア			異なる年齢クラスのペア		
	年少・年少	年中・年中	年長・年長	年少・年中	年中・年長	年少・年長
順手・逆手が一貫 (%)	14 (87.5)	14 (93.3)	15 (83.3)	14 (100)	11 (78.6)	11 (91.7)
順手・逆手が変化 (%)	2 (12.5)	1 (6.7)	3 (16.7)	0 (0.0)	3 (21.4)	1 (8.3)

表4. ペアの成員の年齢と手の形態の出現数（ペアの数）

	年少・年中	年中・年長	年少・年長
高年齢の成員が順手 (残差)	7 (0.54)	7 (1.54)	2 (-2.10)
有意水準	ns	ns	*
低年齢の成員が順手 (残差)	7 (-0.54)	4 (-1.54)	9 (2.10)
有意水準	ns	ns	*

* <.05

今回の研究では大人と子どもが手をつなぐ場面の組織的な観察は行なわなかったが、一般的な観察から大人-子ども間で手をつなぐとき、ほとんどの場合子どもが順手であることがわかる。このことと上記の結果をあわせて考えると、順手でつなぐことと逆手でつなぐこととの意味の差が示唆される。つまり、順手は“つないでもらうための手”あるいは追従の手であり、逆手は“つないであげるための手”あるいは誘導の手と考えてよいのではないだろうか。したがって、年齢差の小さい年少児・年中児のペアあるいは年中児・年長児のペアではどちらが順手でつなぐのかに偏りはなく、年齢差の大きい年少児・年中児のペアで年少児が順手、年長児が逆手になることが多くなったと考えられる。

これらをさらに検討するため、つなぐ手の最終的な形態に加えて、子どもどうしが手をつなぐときのつなぎ方（最終的な手の形態に至るまでの過程）を分析した。

分析2. 手のつなぎ方について

まず、ペアが手をつなぐタイミングを分析した。ペアの成員の年齢にかかわらず、成員の内のどちらかが先に手を差し出した場合と、データからはどちらが先とは言えず同時と判断された場合との出現ペア数を、一回目、二回目毎に表5に示した。なお、年長どうしのペアの1組にだけ、一方が先に回上位（掌を下、甲を上にした状態）で差し出すケースが見られたため、表5ではその他に分類した（このペアについては、分析3で述べる）。

表5からは、全体的に見て、半数以上のペアにおいて差し出される手は同時であることが分かった。次いで、ペアのうちのどちらかが先に順手を差し出すケースが多く、ペアのうちどちらかが先に逆手を差し出すことは少ないことが分かった。その他のケースを除き、一回目、二回目毎に出現の分布を χ^2 検定したところ、ペアの種類による分布のばらつきは認められなかった（一回目； $\chi^2(10) = 8.07$ ，二回目； $\chi^2(10) = 8.34$ ）。

次に、ペアの成員が異なるクラスで、成員のどちらかが先に手を差し出していたペア（一回目；年少児・年中児5ペア，年中児・年長児6ペア，年少児・年長児7ペア，二回目；年少児・年中児5ペア，年中児・年長児3ペア，年少児・年長児8ペア）を対象とし、先に手を差し出したのは年齢の低いあるいは高いクラスの子どもか、また、差し出された手は順手あるいは逆手だったのかを

表5. 一回目と二回目におけるつなぐタイミング（ペアの数）

	同年齢クラスのペア			異なる年齢クラスのペア		
	年少・年少	年中・年中	年長・年長	年少・年中	年中・年長	年少・年長
一回目						
順手が先 (%)	8 (50.0)	6 (40.0)	7 (38.9)	4 (28.6)	6 (42.9)	5 (41.7)
逆手が先 (%)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (11.1)	1 (7.1)	0 (0.0)	2 (16.7)
同時 (%)	8 (50.0)	9 (60.0)	8 (44.4)	9 (64.3)	8 (57.1)	5 (41.7)
その他 (%)	—	—	1 (5.6)	—	—	—
二回目						
順手が先 (%)	5 (31.3)	5 (33.3)	5 (27.8)	4 (28.6)	3 (21.4)	6 (50.0)
逆手が先 (%)	1 (6.3)	0 (0.0)	1 (5.6)	1 (7.1)	0 (0.0)	2 (16.7)
同時 (%)	10 (62.5)	10 (66.7)	12 (66.7)	9 (64.3)	11 (78.6)	4 (33.3)
その他 (%)	—	—	—	—	—	—

表 6. ペアの成員の年齢クラスと先に差し出された手の形態の出現数 (ペアの数)

	年少・年中	年中・年長	年少・年長
一回目			
順手が先・高年齢	2	4	2
順手が先・低年齢	2	2	3
逆手が先・高年齢	1	0	2
逆手が先・低年齢	0	0	0
二回目			
順手が先・高年齢	2	1	3
順手が先・低年齢	2	2	3
逆手が先・高年齢	1	0	2
逆手が先・低年齢	0	0	0

一回目、二回目別にカウントし表 6 に示した。

表 5, および表 6 の結果から, 幼児の場合どちらかが先に手を出すときには順手を出すことが多く, 高年齢クラスと低年齢クラスによる差もないことがわかった。また, 先に逆手を出す事例は全体として少なく, その場合でも低年齢クラスの子どもが先に逆手を出すことはないことがわかった。これらのことが示しているのは, 幼児にとって「手をつないでごらん」と教示され“手をつなぐ”ことは, “手をつないでもらう”ことを意味し, “手をつないであげる”ことを意味しているのではない可能性である。幼児期には仲間との活動は増加するし (Garvey, 1990) 二者間の関係性が特定のにはなる (Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin, 1985) が, それは固定的な関係ではない。リーダーとフォロワーのような明確な方向性のある関係性が生じ始めるのは, 幼児期の後半になってからである (Asher & Gottman, 1981)。したがって, 幼児期には“誘導の手”である逆手を先に出す行為は全体的に難しく, 年長児になってから徐々に可能になってくるのではないかと考えられる。

分析 3. つなぎ方に見る幼児どうしの行動調整過程について

幼児のペアのうち, 最終的な形態で手をつなぎ歩き出すまでに, つなぎ方が変化した事例がいくつか観察された。これらをつなぎ方のコンフリクトとみなし分析の対象とした。コンフリクトのあった事例は 7 ケースであった。これら 7 ケースの概要と行動のスキプトを表 7 に示した。なお表 7 では, ペアの成員のどちらかが先に手を出したのであればその者を成員 1 に, 同時に手を出した場合には年齢 (月齢) の低いほうを成員 1 として表記した。

事例 1 から事例 4 までは, ペアの成員のクラスは異なるが非常に良く似たパターンである。成員 1 が出した順手に対し, 成員 2 が後方から同じように順手を出し成員 1 の手に触れている。それに応じて成員 1 が逆手に変えて手をつなぐというパターンである。事例 3 ではそれが 2 度繰り返され, 事例 4 では二回目の手つなぎにおいて上記の行動が生起していた。これらのコンフリクトは順手—順手のコンフリクトといえるだろう。成員 1 は, 最初に“つないでもらう手”として手を出す, 成員 2 の“つないでもらう手”に応じてつなぐ手を変化させていた。

事例 5 は, 分析 2 で述べたケースである。年長児どうしのペアだが, 成員 1 はあらかじめ掌を下向きにして通常つなぐ位置よりもかなり上 (肩の辺り) に手を差し出していた。そこに成員 2 が順

表 7. コンフリクトの起こった事例の手をつなぎ終えるまでの課程

事例	ペア		行動スクリプト	
	成員 1	成員 2	成員 1 の行動	成員 2 の行動
1	年長 (6:0)	年長 (6:2)	(一回目) 順手を出す 逆手に変えてつなぐ	1 の後方から順手を出し 1 に触る
2	年少 (3:11)	年長 (6:1)	(一回目) 順手を出す 逆手に変えてつなぐ	1 の後方から順手を出し 1 に触る
3	年中 (4:11)	年長 (5:9)	(一回目) 順手を出す 2 の後方から順手を出す 逆手に変えてつなぐ	1 の後方から順手を出し 1 に触る 1 の後方から順手を出し 1 に触る 「んー」と不満気な発声
4	年長 (5:10)	年中 (5:3)	(二回目) 順手を出す 逆手に変えてつなぐ	1 の後方から順手を出す
5	年長 (6:0)	年長 (5:7)	(一回目) 回上位で手を出す 逆手でつなぎ そのまま順手に変える	順手を出す 応じて逆手に変える
6	年中 (5:5)	年長 (6:1)	(一回目) 逆手を出す 手を離し順手でつなぐ 手を離し逆手でつなぐ	同時に順手を出してつなぐ 同時に逆手でつなぐ 「したがいいの」と発話 同時に順手に変える
7	年長 (6:2)	年長 (6:2)	(二回目) 順手を出す 応じて逆手を出す	同時に逆手を出してつなぐ 「やりにくい」と発話し手を離す 順手を出す

手で手を出したが、1 は自分からその掌を取りに行きそのまま自分の手が順手になる方向に腕を回旋させていた。観察者には、2 の差し出す手がどちらであっても、自分の手が最終的に順手になるように1 が待ち構えているように解釈された。

事例 6 と 7 は順手と逆手を同時に出し一旦手をつないだが、その形態が変化した例であり、順手-逆手のコンフリクトといえよう。事例 6 では 2 度のつなぎ直しが起こっていた。どちらがリードしたのかは VTR 上では分かりにくいだが、成員 2 が「したがいいの」と発話しており、2 の意思

で最終的な形態が決定されたと解釈された（2は順手を「した」と表現していた）。事例7でも一旦つないだ手の再度のつなぎ直しが観察された。成員2が「やりにくい」と発話しており、また、つなぎ直しでは2が先に出した順手に成員1が応じていることから、この事例も最終的なつなぎ手は2の意思で決められたと解釈できる。

これらの事例から、次の二つのことが示唆される。第一は幼児の順手に対する嗜好である。順手-順手のコンフリクトは、どちらが順手でつなぐかをめぐるコンフリクトである（事例1～4, 5）。また、順手-逆手のコンフリクトでは最終的に順手でつないだ成員の意思が反映されていた（事例6, 7）。分析2で述べたように、幼児期には“手をつなぐ”ことは“手をつないでもらう”ことである点がここでも確認された。

第二に示唆されるのは、幼児の行動調整能力である。手つなぎ行動の観察は全体で87ペアが2度ずつ、つまり174事例を対象に行なわれた。コンフリクトの起こった7つの事例は、全体の4%となり非常に少ないといえる。また、コンフリクト命名はしたが、解決までの過程は非常に短くそれが原因でトラブルに発展することもなかった。7つの事例全ては、異なるペアにおいて生じた。つまり、一回目にコンフリクトをおこしたペア（事例1, 2, 3, 5, 6）は、二回目の手つなぎにおいてコンフリクトは起こらず、手のつなぎ方も一回目の最終形態になっていた。幼児期は、仲間どうしでコンフリクトをできるだけ避けるような相互作用を行なう（Parker & Gottman, 1981）が、手をつなぐ行為においてその相互作用は幼児にとってはたやすいと考えられる。

分析2で述べたように、幼児どうしが手をつなぐとき、そもそも同時に手を出してつなぐことが多かった。しかし、VTR上はほとんど同時に手をつないだケースにおいても、調整過程がなかったとはいえない。順手に対する嗜好があるのならば、このようなケースでも手や腕の動きだけからは観察できない、例えば視線や表情などのチャンネルを使ったコミュニケーションによって調整がなされている可能性があるだろう。言語を用いた調整過程は、コンフリクトのあった事例6, 7でのみ明らかな主張として観察された。どちらも発話者は年長児であり、幼児期には言語能力の発達にともない言語による相互作用が増える（Garvey, 1984）ことを示していると思われるが、コンフリクト自体が起こりにくい相互作用では言語を使うまでもなかったのかも知れない。

4. まとめ

幼児にとって、手をつなぐことは第一義的には“手をつないでもらう”ことを意味するだろう。それは身体接触という乳児期から存在するコミュニケーション（大坊, 1990）の延長上にあると考えられ、幼児も触覚から得られる安心感や安定感への嗜好性を持っている。親への身体接触と仲間への身体接触の質の違いは乳児期から観察される（Vandell, 1980）という主張もあるが、手をつなぐ行為における身体性は否定されるものではない。

幼児どうしが手をつなぐとき、誘導-被誘導という新たな意味が生じてくることになる。つまり、二者間の関係性が反映される行為である。今回は表面的な年齢差のみを検討したが、仲の良さや優位性（dominance）なども検討していく必要があるだろう。個人的要因、二者間の要因、集団的要因、場面的要因といった所属集団の社会的関係によって個人の行動は規定されている（Kenny, & La Voie, 1984）のであれば、今回の手つなぎ行動は、順手への嗜好の強さ、二者の優位性、クラスの要因、組織的観察場面という要因によって影響を受けていたと考えられる。日常場面で生起する手つなぎ行動の観察等も含めて、多層的なデータから手つなぎ行動を解明していく必要があるだろう。

また、手をつなぐ行為は非言語的なコミュニケーションとしても捉えることができる。手をつなぐ際に生じる行動調整は、今回の状況ではごくわずかしき観察できなかったが、二者間の関係性や集団的要因を変数とすればさらに観察できる可能性がある。

今回、大人と子どもとの間で手をつなぐ場合、どちらが先に手を出すのか、それは勝手なのか逆手なのかについては組織的な観察を行なわなかった。子どもが出すであろう順手を“つないでもらう手”と解釈したが、それは一般的な観察に基づいた仮説である。この点をまず実際のデータを収集して検証する必要がある。さらに、大人が出すであろう“つないであげる手”が逆手ならば、発達の過程のどこで勝手から反転していくのだろうか。今後の検討課題としたい。

文献

- Aguilera, D. C. 1967 Relationships between physical contact and verbal interaction between nurses and patients. *Journal of Psychiatric Nursing*, 5, 5-21.
- Asher, S. R. & Gottman, J. M. 1981 *The development of children's friendships*. Cambridge University Press.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現：コミュニケーションにみる発展と崩壊. *心理学評論*, 33, 322-353.
- Garvey, C. 1984 *Children's talk*. Harvard University Press.
- Garvey, C. 1990 *Play*. Harvard University Press.
- Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. 1985 Incidence of "Friendship" and behavior toward strong associates versus nonassociates in preschoolers. *Child Development*, 56, 234-245.
- Kenny, D. A., & La Voie, L. 1984 The social relations model. *Advanced in Experimental Social Psychology*, 18, 141-182.
- McCorkle, R. 1974 Effects of touch on seriously ill patients. *Nursing Research*, 23, 125-132.
- McNamara, J. R. 1969 Behavior therapy in the classroom: A case report. *Journal of School Psychology*, 7, 48-51.
- 中村哲夫 1987 自閉幼児の対人関係回避行動の改善方法—「手つなぎ」行動への注目. *琉球大学教育学部紀要*, 30, 367-373.
- Parker, J. G., & Gottman, J. M. 1989 Social and emotional development in relational context: Friendship interaction from early childhood to adolescence. In T. J. Berndt & G. W. Ladd(Eds.), *Peer relationships in child development*. Wiley.
- 外山紀子 1998 保育園の食事場面における幼児の席とり行動：ヨコに座ると何かいいことあるの？. *発達心理学研究*, 9, 209-220.
- Vandell, D. L. 1980 Sociability with peer and mother during the first year. *Developmental Psychology*, 16, 355-361.
- 山岸陽子 1990 自閉的傾向をもつ幼児の手の動きに関する一考察. *情緒障害教育研究紀要*, 9, 55-58.
- 山本登志哉 2000 手をつなぎ方に見る親のリーダーシップの文化差. *第53回日本保育学会大会論文集*, 702-703.

(京都保育福祉専門学院専任講師)